

特集

メタファー

楠見

孝くみみ たかし

メタファーとデジャビュ

初めて目にしたにもかかわらず以前どこかで見たような印象をもたらすデジャビュ(既視感)。精神医学では記憶異常の問題とされていたが、その認知メカニズムを探ると、未知の現象を既知のものとの類似性を手がかりに理解しようとする、メタファー認知との共通性が浮かび上がる。

一 はじめに

はじめて訪れた場所なのに、なぜか昔訪れたことがあるような気がしたことはないだろうか。あるいは、はじめて会った人なのに以前会ったことがあるような気がしたことはないだろうか。

こうしたデジャビュ(Déjà vu)は、はじめての経験や事象について、以前経験したことのある事象のような印象(既視感)が起こる現象である。こうした現象は、多くの小説が描いているにもかかわらず、その認知心理学的考察は少ない。主に、精神医学が分裂病患者などの幻覚や妄想における

記憶異常(同一視的偽記憶)の問題として扱ってきた。一方、健常者では、デジャビュは疲労などによって心的緊張が低下した際に、まれにおこる現象と考えてきた。しかし、ここでは、デジャビュ現象を異常現象ではなく、メタファーの認識と共通する類似性認知メカニズムによって支えられていると考えていく。

二 メタファーを支える類似性認知

メタファーの生成・理解過程は、主題(topic)となる対象を表現するために、目の前にない類似物(たとえる対象: vehicle)を検索して、結びつける過程と考える(図参照)。

メタファーにおいて、主題とたとえる対象を結ぶのは、何らかの類似性である。ここでは、メタファーを類似性のレベルに対応させて、特徴メタファーと関係・構造メタファーに分類する。ただし、主題とたとえる対象が言葉通りに似ている場合には、メタファーではなくなる(例: 蜜は砂糖のようだ)。つまり、メタファーの主題とたとえる対象の間には、

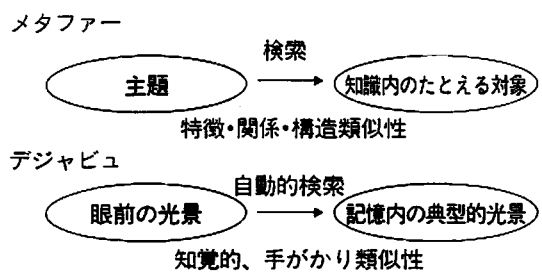


図 デジャビュとメタファーを支える類似性に基づく検索

カテゴリーの違いなどの非類似性が同時に存在することが大切である(例: 誘惑は蜜のようだ)。ここで主題とたとえる対象の類似性は、メタファーの理解可能性に影響を及ぼし、非類似性はメタファーの斬新さや面白さに影響を及ぼしている。そして類似性と非類似性の両者の緊張がメタファーの良さを生み出している(楠見、一九九〇)。

特徴メタファー、たとえば「愛は角砂糖だ」の生成・理

解は「甘い、壊れる、…」といった情緒・感覚的意味における類似特徴に支えられている。特徴メタファーの理解には、カテゴリーの異なる主題「愛」とたとえる対象「角砂糖」の間に類似特徴を発見するプロセスがある。ここで、「甘い、壊れる…」といった特徴は、主題「愛」では目立たないが、たとえる対象「角砂糖」では目立つ特徴であることが、メタファーの効果を生み出す。したがって、特徴メタファーを生成する場合は、どのような特徴における類似性を強調したいかによって、異なるたとえる対象が選択される。たとえば、「愛」の「どろどろした」特徴を強調したいときは、その特徴を持つ対象のカテゴリーでもっとも典型的な「沼」でたとえる。反対に、「美しい」特徴を強調したいときは、その特徴カテゴリーでもっとも典型的な「湖」でたとえる。これらの比喩を理解した後には、SD法評定や連想を求めると、こうした意味特徴の評定値や連想頻度が高まることを見いだされている(楠見、一九九〇a)。

関係メタファー、たとえば「眼は心の窓だ」の生成や理解は、四項アナロジーの関係類似性、すなわち、「眼」と「心」の関係を見出し、それを、「窓」と「家」の関係に写像することに支えられている。

メタファーとデジャビュ

さらに、構造メタファー（概念メタファー）では、「人生は旅」というように、「旅」に関する構造的知識（分かれ道、道連れ、…）を抽象概念「人生」に写像することによって、「人生」を記述・説明している。これは、構造的類似性に支えられたアナロジーとみなすこともできる（楠見、二〇〇二）。以上述べたメタファーの分類は、解釈の水準ということもできる。たとえば、「愛は角砂糖だ」は、「甘い」特徴レベルでの解釈だけでなく、関係や構造レベルでの解釈「角砂糖が甘いコーヒーを甘くするように、愛は人の心を変える」、「角砂糖はコーヒーに一個でよいように、愛は人生で一回でよい」といった理解も可能である（楠見、一九九七）。

三 デジャビュ経験を支える類似性認知

デジャビュ現象は、異常心理現象ではなく、二で述べたメタファー認知と同じく、人の認知における類似性認知メカニズムの働きとして考えられる（図参照）。すなわち、いま経験していることが、類似した過去経験を自動的に想起させる。これは、メタファーにおいて、主題と類似したたとえる対象を記憶内から検索するメカニズムと共通する。ここで、デジャビュ現象を支えているのは、現在の経験と過去の経験

の類似性である。デジャビュには（自分の記憶を評価する）メタ記憶である既知感が関わる。一般に既知感は検索情報の量に比例して高まり、未知感は逆である（楠見・高橋、一九九三）。デジャビュ現象は、既知感はあるが、（エピソード記憶や関連知識などに基づいて）未経験の事象であることを同定している点で、現実性識別ができていない（したがって虚再認とは異なる）。これは、検索後の記憶の源（ソース）をモニターし決定するプロセスにおいて働く。検索過程が無意識的なものに対して、決定過程は意識的と考えられる。

楠見（一九九七）は大学生・大学院生二〇二名の被験者に対して、デジャビュ質問紙を実施した。そこでは、以下のようにデジャビュ経験を尋ねた。（一）場所デジャビュ初めての場所にきたのに、周囲の状況を見渡すと、何となく昔、来たことがあるような気がした。（二）人デジャビュ初めて会った人なのに、何となく昔、会ったことがあるような気がした。それぞれの既視感経験に関して、（a）いつ（年・月前、歳の時）、（b）どこで、（c）既視感を引き起こしたそのときの状況や手がかり、（d）既視感の源になった過去の経験を思い出せるか、（e）既視感の源になった過去の経験は、いつ（年・月前、歳の時）、（f）どこでか—について回

答を求めた。

結果は、場所あるいは人についてのデジャビュ経験者は七二％であった。場所に対する経験（六三％）が人に対する経験（三五％）よりも多かった。さらに、デジャビュ経験報告の詳しいレベルを見ると、場所デジャビュ報告では、経験した時と場所や対象を同定できないケースが三九％あった。一方、人に関するデジャビュ経験は、誰に対して起こったかという同定率が八九％と高い。これは、（誰であるかの）顔の同定は、場所の同定に比べて、詳細な情報による厳密な照合が必要だからである。さらに、人のデジャビュ経験を同定できた上での（過去の源となった人は誰かという）原経験の同定率は五七％である。それに対して、場所の既視経験を同定した上での（過去の源となった場所はどこかという）原経験の同定率は、二三％と低い。このように場所のデジャビュは、人のデジャビュに比べて、原経験が漠然としていて、検索情報が少なくても起こる。また、デジャビュの源となる原体験は、二年以上前から一七年前にわたる長期記憶に貯蔵された経験であった。

デジャビュ内容に関して、別の一〇三名の大学生にどの場所において、場所デジャビュが起こったことがあるかを質問

紙で尋ねた。その結果、並木道、古い町並み、公園、庭園、校舎、寺社等は、三割以上の人が、デジャビュ経験を報告していた（楠見、一九九七）。これらの光景は、しばしば目にし、しかもその光景は相互に類似している。人は、これらの光景を繰り返し見ることによって、その光景は重なり合い、細部は失われた形での典型的な光景（たとえば駅前の広場から広がる並木道や、西洋庭園、校舎など）が記憶内に形成される。そして、新たに目にした光景が記憶内の典型的な光景と類似していると、既視感が起こると考えられる。典型的な光景ほど、（見たことがないのに見たことがあると感ずる）虚再認を起こしやすいことは、様々な寺の写真を用いた実験でも見いだされている（松田・楠見、二〇〇二）。さらに、既視感を起こした光景と原経験の結びつきは、知覚の手がかり、雰囲気、天気、気分などの全体的な印象の類似性によって支えられている（楠見、一九九七）。これらは、記銘時と検索時の物理的環境（光景の類似性など）や心理的環境（見た時の気分の類似性など）の一致が検索可能性を高める環境的文脈依存記憶現象、感情的状態依存記憶現象として説明できる。

一方、人に関するデジャビュの経験は、初対面の同級生のように、パーソナルな関係の開始時に起こる。行きずりの人

に対して起こることは少ない。原経験は、最近会っていない昔のクラスメイトのように、知人程度の人が多い。そして、既視感を引き起こした人と原経験となる人は、外見や雰囲気も含めた全体的、構造的な類似性がある。

なお、人デジャビュと同様に類似性認知に基づいているが、デジャビュとは区別できる現象が二つある。第一に、人違いは、髪型・体型・服装などの表面的類似性を手がかりとした部分的照合に基づく性急な誤認知である。これは、初対面という現実性識別ができていない点で、デジャビュと区別する。

第二に、「Aさんの恋人はタレントの〇〇のようだ」といった比喩的対人認知は、他者を認識（記述、説明、予測）する際に、有名人や知人を、メタファーとして意図的に利用する点で、デジャビュとは異なる。

以上のことから、デジャビュとその関連現象は、人の認知機構の一般的特性である類似性認知に基づくと考えられることができる。すなわち、ある新しい経験は、類似した過去経験を長期記憶から無意識的に想起させる。そのことが、新しい経験に対処するために役立つ。たとえば、場所であれば、どの方向に行けば何があるかを予期したり、人であれば、その人

とどのようにつきあえばよいかを予測したりするわけである。こうした予測は当たることもあるが、はずれることもある。それは、現在の経験と過去の経験は類似しているが同一ではないからである。これは、メタファーやアナロジーに基づく推論が必ずしも正解を導かないことと共通している。

五 まとめ——メタファーとデジャビュを支える類似性認知
ここでは、メタファー認知とデジャビュ現象は、人が記憶内の事例にアクセスする際の類似性の役割において共通することを、認知心理学的に検討した。

人の認識において、類似性は近接性と並んで、世界をカテゴリー化し、記憶や知識を形成し、それを利用する上で大切な働きをしている（楠見、2003）。最後に、三つの主要な比喩を取り上げて考えてみると、メタファーは類似性に、（ここでは取り上げなかったが）メトニミー（換喩）は近接性に、シネクドキー（提喩）はカテゴリーに支えられている（瀬戸、一九六〇）。すなわち、三つの主要な比喩は、知識構造に依拠し、知識構造の基盤として位置づけられる（楠見・辻、2002）。

デジャビュ現象は、事象間の類似性だけでなく、事象の近

接情報（天候や雰囲気など）の一致が重要な記憶検索手がかりとなっていた。さらに、長期記憶において（事象に基づくカテゴリー構造である）典型的な光景（たとえば典型的な寺の山門）が形成されているため、新しい光景を見た時に、類似した典型的な光景が検索されやすい。このようにデジャビュ現象も、メタファーと同様に、類似性を中心に、近接性そしてカテゴリーの構造に支えられていた。

メタファーとデジャビュは、一見似ていない事象が、時間や空間を超えて結びつくことで、文学者の創造性をかき立て、作品に生かされてきた。一方、認知心理学者にとつては、これらの研究は、人の柔軟な類似性認知メカニズムと記憶や知識の構造の解明に結びつくものであると考える。

【謝辞】

草稿に対して、京都大学大学院教育学研究科大学院生の松田憲、平岡齊士、米田英嗣、野村光江の諸氏から貴重なコメントをもらいました。記して感謝します。

【文献】

楠見孝（一九九六a）「比喩理解における主題の意味変化—構成語間の相互作用の検討」『心理学研究』五巻、三三—三七頁

楠見孝（一九九六b）「デジャビュ（既視感）現象を支える類推的想起」『日本認知科学会第一一回大会発表論文集』六九

楠見孝（一九九七）「比喩の処理過程と意味構造」風間書房

楠見孝（一九九八）「デジャビュ（既視感）経験を引き起こす場面の特性—自伝的記憶と夢における類似記憶表象」『第7回日本発達心理学会発表論文集』三三

楠見孝（二〇〇二）「比喩理解—なぜわかるのか？ どうして使うのか？—森敏昭編『おもしろ言語のラボラトリ（認知心理学を語る2）』北大路書房

楠見孝（二〇〇三）「類似性と近接性—人間の認知の特徴について」『人工知能学会誌』二七巻、一—二七

楠見孝・高橋秀明（一九九三）「メタ記憶」安西祐一郎ほか（編）『認知科学ハンドブック』共立出版

楠見孝・辻幸夫（二〇〇三）「知識獲得のメカニズムを探る」ヘリレー対談

『認知科学との対話』月刊『言語』三巻、三三—三九

松田憲・楠見孝（二〇〇二）「シーン認知における単純接触効果—刺激の典型性が感性判断に及ぼす効果」『日本心理学会第六十四回大会発表論文集』二二

瀬戸賢一（一九六〇）『レトリックの宇宙』海鳴社

（京都大学大学院教育学研究科／認知心理学）